

観世元章手沢本『二百十番謡目録』

加筆の演能記録について

表 きよし

十五世観世大夫元章の明和改正謡本の総目録たる『二百十番謡目録』（以下『目録』と略記）は、通常一冊単独の形であるが、観世文庫には薄葉紙を用いて『九祝舞』『独吟』『習十番』と合綴した形の特製本が蔵されている。元章手沢本だったらしくて全体に様々な考証が書き込まれているが、特に『目録』には、朱や墨で間狂言・太鼓の有無や五番立分類の萌芽らしい演能順分類など、各種の書き込みがある。特に注目されるのは、75曲に、「寛正五甲申四月五日於糺河原正盛勤之」などと演能記録が注記されていることである。同曲に二つの記録を注することもあり、催し別に整理して略記すると、左の如くである。

- 春日竜神・夕顔・野宮。④同年3月9日殿中（または仙洞）：安宅・天鼓・鶴・二人静・鞍馬・天狗・三輪・泰山府君・卒都婆小町・百万・石橋。（以上の演者は元重か正盛）
- ⑤永正11年（一五〇四）京新黒谷：遊行柳（元広）。  
 ⑥永禄4年（一五六一）3月2日三好筑前守邸：楊貴妃（元忠）。⑦同年3月晦日三好筑前守邸：屋島・熊野・松風・三輪・野守・春日竜神（元忠）。  
 ⑧永禄11年2月29日厳島：西王母（元忠）・弄太鼓・松虫（元尚）。⑨同年10月24日殿中：道成寺（元尚）。⑩文禄2年（一五九三）8月13日肥前名古屋：右近。⑪慶長6年（一六〇一）3月大坂城：経政。⑫慶長8年4月5日二条城：輪藏。  
 ⑬慶長10年5月4日伏見城：張良。⑭同年7月7日伏見城：染川。⑮同年10月8日伏見城：大江山。⑯慶長11年8月2日二条城：大仏供養。⑰慶長12年1月8日江戸城：龍虎。  
 ⑱元和4年（一六〇八）4月1日江戸城：西王母。  
 ⑲寛永2年（一六二五）6月13日西丸：松山鏡。⑳寛永6年9月21日江戸城：榎島。㉑寛永13年

- 5月10日（所不記）：千手。㉒寛永16年6月24日堀田加賀守邸：雲雀山。㉓同年10月17日二丸：羅城門。（⑧～㉓の演者重成）。
- ㉔慶安4年（一六五〇）11月27日江戸城：寝覚（重清）。㉕天和2年（一六六二）4月28日江戸城：熊坂（重賢）。
- ㉖元禄2年（一六八七）8月25日甲府様：昌俊。㉗元禄5年10月27日柳沢出羽守邸：葛城鴨。㉘元禄7年秋元但馬守邸：鶴龜。㉙元禄8年4月5日江戸城：忠信。㉚元禄9年8月25日江戸城：生田敦盛。㉛同年観世大夫宅：東方朔。㉜元禄10年9月27日江戸城：合浦。㉝同年12月15日松平右京大夫邸：谷行。㉞元禄11年2月晦日江戸城：第六天。㉟元禄16年7月9日尾張邸：俊寛。（㉞～㉟までの演者重記）。
- ㊱享保3年（一七二〇）3月11日二丸：嵐山（清親）  
 ㊲明和3年（一七六六）9月22日江戸城：国樞（元章）・梅（元長）。

以上の演能記録の書き込み（以下「加筆」と略記）が何に基づいたかを考えてみたい。

最も早い①の糺河原勸進猿楽には、番組や舞台略図などを収めた記録が残されている。

「群書類従」所収の『糺河原勸進猿楽日記』『異本糺河原勸進猿楽記』と「加筆」を比較すると、シテが正盛か音阿弥かに異同が見られ、どちらとも完全には一致しない。三日間の演目26番のうち『目録』に含まれる曲は22番あるが、

〈放下僧〉は「加筆」では翌年の演能記録が採用されており、〈丹後物狂〉〈名取編〉は加筆がない。元章が見た記録が不完全なものであったか、彼の見落としていたのであろうか。

寛正六年の②と③は、「親元日記」によれば実は2月28日の催しで、場所は仙洞御所だった。それを二回分とし、〈葛城〉が両方に重出していることからは、元章はこの催しに関する複数の資料を見、日付の違いから別々の催しと考えたらしい。「親元日記」は予定の能十番と予備の七番を先に記し、当日実際に上演された十五番も記録しているが、それと比較すると、「加筆」では用意されただけの曲も上演したものと見なしている。この催しの番組は、観世文庫蔵の元章編と考えられている番組集『雲上散楽会宴』(『会宴』と略記)にも収められており、正月二十七日と誤る点も同じで「加筆」との関係の深さを感じさせるが、「会宴」は用意されただけの曲を含んでいないし、シテが正盛か元重かについて両者に相違が多く、「加筆」はむしろ「親元日記」と近い。④の三月九日仙洞御所での能も「親元日記」と『会宴』に番組があるが、ここでもシテが正盛か元重かで両者に相違があり、「加筆」はやはり『親元日記』と一致する。同じく元章の手になる『会宴』、「加筆」の二つの演能記録のこうした違いは、ワキや囃子方の氏名まで記した

詳細な番組たる『会宴』の信頼度に大きな疑問を抱かせるのではなからうか。

⑥⑦の三好邸への將軍義輝御成能の番組も他に資料があるが、元章の「加筆」は〈屋島大事〉〈野守白頭〉などと、7曲すべてに小書名を添えている点の特異である。当時小書名で記した番組があったとは考えられず、元章の創作なのではあるまいか。⑧の敵島での分は敵島神社側の記録(野坂文書)と合致する。観世家にも何か記録が伝わっていたのであろうが、現存していないようである。⑩⑪⑫の諸記録は、観世文庫に現存する『文祿慶長年間御能組』とほとんど一致する。観世大夫家に早くからあった同書を参照したのであろう。

⑬⑭は十世重成の、⑮⑯は十三世重記の、断片的な記録である。まとまった形でのそうした演能記録は伝存しないが、『隆光僧正日記』などによって確認できる曲もほぼ半数ある。信ずるに足りる当時の資料が元章の手元にあったのであろう。ことに重記の場合は自宅での演能記録(⑱の〈東方朔〉)が採用されており、彼自身の記録が残されていたのであろう。そうした他の資料では把握できない記録を含む点も「加筆」の価値の一つである。

簡略な紹介に終わったが、「加筆」以外の元章の注記全体を含めて、詳しくは別の機会に譲りたい。(国士館短期大学助教授)